

映像ソフトに観る《タンクレーディ》

水谷 彰良

初出は『レコード芸術』（音楽之友社）2011年11月号の拙稿「DVD 発クラシック名作劇場 35 ロッシーニ：歌劇《タンクレーディ》」、及び『ロッシニアーナ』（日本ロッシニア協会紀要）第34号（2014年2月発行）掲載の改稿版。書式を変更して日本ロッシニア協会 HP に掲載します。（2014年5月）

《タンクレーディ》——ヒットソングを生んだ成功作

19世紀前半におけるヨーロッパ最大のヒットソング、それがロッシニア《タンクレーディ》第1幕の〈ディ・タンティ・パルピティ（*Di tanti palpiti*）〉（第3曲タンクレーディ登場のカヴァティエーナのカバレッタ）である。弾むようなリズムでタンクレーディが恋人との再会を思い、「きみはぼくにまた会い、ぼくはきみにまた会える」と胸を高鳴らせるこの歌はヴェネツィアの民衆を熱狂させ、弁論中の法廷で口ずさむ不謹慎な輩に判事が静粛を命令せざるを得なかった、との逸話も残されている（スタンダール『ロッシニア伝』）。興味深いのは、この歌が時代遅れと見なされたオペラ・セーリアのジャンルの楽曲であること。そして《タンクレーディ》に新風を吹き込んだロッシニアは、《セミラーミデ》までの10年間、旧弊なこのジャンルに最後の光輝を付与するのである。

原作に位置するヴォルテールの5幕悲劇『タンクレード（*Tancredi*）』（1760年9月3日パリのコメディ・フランセーズ初演）は、初演から6年後の1766年に最初のオペラ化がトリノーでなされ、続いて複数のオペラがドイツとイタリアで現れた。ロッシニアの1年前にもルイージ・ロマネッリ台本／ステーファノ・パヴェージ作曲《タンクレーディ》がミラーノのスカラ座で初演されるなど、題材そのものは広く知られていた。ロッシニアの台本作家ガエターノ・ロッシはパヴェージ作品を含む複数の台本を下敷きに、前例に倣って悲劇的結末ではなくハッピーエンドを採用した。

舞台は11世紀初頭のシチリア島シラクサーザ（シラクサ）。サラセン軍の脅威を前に、指導者アルジーリオは反目するオルバツァーノとの和解をはかり、娘アメナイーデをオルバツァーノに嫁がせると約束する。アメナイーデは祖国の敵とされた騎士タンクレーディを愛していたが、父から彼が帰国すれば死刑にすると言われ、再会したタンクレーディに逃亡を促す。アメナイーデの婚約を知ったタンクレーディは絶望し、素性を隠して義勇軍に参加を申し出る。そこにオルバツァーノが現れ、アメナイーデがサラセンの将軍ソラミーロと内通した証拠の手紙（実はタンクレーディに宛てたもの）を示し、彼女を裏切り者として告発する。

アルジーリオは苦悩しながらも娘の死刑判決に署名するが、タンクレーディが正体を明かさずに彼女の守護者の名乗りをあげ、決闘でオルバツァーノを倒し、その無実を証明する。だが、なお恋人への疑いを捨てられぬタンクレーディは戦場での死を望み、打ち倒した敵将の口からアメナイーデの潔白を聞き、疑いを解いて和解する——以上がこのオペラ初演版のあらすじである。

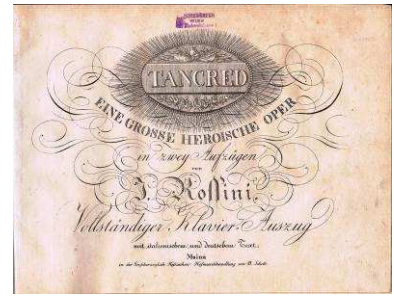
作品の成立過程と特質

ロッシニア財団がこのオペラの実集版を出版したのは1984年。当時は作品の成立過程を詳らかにする資料が未発見のため、ヴェネツィアのフェニーチェ劇場からの委嘱は1812年9月26日にミラーノのスカラ座で《試金石》が大成功した後、と推測されていた。そしてこれに先立ちロッシニアがヴェネツィアのサン・モイゼ劇場との間に二つのファルサを作曲する契約を結んでいたことからトラブルに発展したと考えられていた。

だが、2001年に再発見され2004年に公開されたロッシニアの自筆書簡から、フェニーチェ劇場の興行師の接触が《試金石》初演の4ヶ月前に始まり、6月20日付の母宛の手紙に「ラ・フェニーチェとの契約書に署名しました。十分な金額が払われます」と記したことが判った。同月30日と推測される手紙には、契約の成立と共に予定された3人の歌手の名前があり、「ロッシが良い台本を書く」と断言している。台本がいつ完成したかは不明であるが、経験の乏しいオペラ・セーリアの契約をロッシニアが半年以上も前に結び、熟慮する期間を得たことは、名作の誕生と無縁ではなからう。

本作の特色は古典的な様式と新鮮な音楽の絶妙なカップリングにあり、序曲はオペラ・ブッフア《試金石》の序曲をそのまま用いている。18世紀にカストラートが務めた英雄タンクレーディを男装コントラルトとしたのは、フランス支配下のイタリアでカストラートが追放され、女性歌手がこれに取って代わったためである。フェニーチェ劇場が提案した主役歌手もソプラノのエリザベッタ・マンフレディーニとコントラルトのアデライーデ・マラノッテで、ヒロインの父アルジーリオは定石どおりテノールに与え、敵対するオルバツァーノをバスとすることで四つの声種に割り振られている。

楽曲構成も定型的で、第1幕は導入曲に続いてアメナイーデ、タンクレーディ、アルジーリオがカヴァティーナやアリアを1曲ずつ歌い、アメナイーデとタンクレーディの二重唱と合唱曲を経て、アンサンブル・フィナーレで締め括られる。第2幕は3人の主役のアリアとタンクレーディの絡む二つの二重唱を中心に、オペラ・セーリアで好まれた牢獄のアリアと神への祈り（第10・12曲）を設け、フィナーレ前に主役の大シェーナとアリアを置き、トランペットを伴う勇壮な音楽を採り入れている。定型からの逸脱は第1幕中央のアンサンブルの欠如と、第2幕に端役イザウラとロジューロのシャーベットの Aria を与えながら準主役オルバツァーノのソロが絶無であること。これはオルバツァーノ役の歌手の能力が低く、アリアと彼の絡むアンサンブルを断念した結果と推測されている。



《タンクレーディ》ピアノ伴奏譜のタイトル頁
(マインツ、ショット社、1817年。筆者所蔵)

特筆すべきは清新なロッシェニの音楽の魅力である。アリアの主題やコロラトゥーラはもとより隔々に20歳のロッシェニの瑞々しい感性がきらめき、スタンダールの言う「汚れなき純真さ」に満ち溢れている。アメナイーデとタンクレーディの二重唱のハーモニーの美しさとカバレッタの爽快さも、ベルカント歌唱の未来に新たな扉を開くものとなった。

1813年2月6日に行われた初演は女性主役の体調がすぐれず、楽曲をカットした挙句に第2幕の途中で幕を下ろしたが、ロッシェニはシーズン中に楽曲を差し替える改訂を施し、3月6日の最終日には歌手たちを称えて場内に花が撒かれ、鳩やカナリヤが放たれたという。

悲劇的フィナーレの復活と初期のピッツィ演出

《タンクレーディ》のもう一つの特色、それが初演翌月のフェッラーラ再演用に作られたヴォルテール原作に沿う悲劇的フィナーレである（以下フェッラーラ版と記す）。これは初演歌手マラノッテの愛人だった貴族ルイーダ・レーキの助言とテキストに基づく改作であるが、主人公の死による幕切れが聴衆の不興をかい、初演のみでお蔵入りとなった。その自筆楽譜が再発見されたのは1976年、復活上演は翌1977年10月18日にヒューストンにて、マリリン・ホーンの主演でなされた。静謐かつ真摯な悲劇的フィナーレは高く評価され、その後の上演では初演版の第16曲以降をフェッラーラ版と差し替えるヴァージョンが主流となっている。

演出面での刷新は、演出家ピエール・ルイーダ・ピッツィによってなされた。その舞台は1982年8月ペーザロのROF（ロッシェニ・オペラ・フェスティバル）が初出で、ルチア・ヴァレンティーニニテッラーニがタンクレーディを歌った。この上演でピッツィはロッシェニ劇場の舞台に金色の壮麗な宮殿を再現し、客席に頭を向けて仰向けに倒れたタンクレーディの歌う最後のカヴァティーナが観客の感動を誘った。

続いてピッツィは1991年ROFのために新たな舞台を制作する。これは体育館バラフェスティバルの広い舞台を城の内庭に見立て、中央の水路をタンクレーディの小船が進み、騎士を乗せた本物の馬が行進するなどスペクタクルな演出が観客の度肝を抜いた。このように、現代の《タンクレーディ》受容には演出家ピッツィの存在が深く関わっているのである。

共通点の多い3種の映像と上演

ここで上演映像に話を移そう。これまで正規に発売されたDVDは、次の三つである。

- ① 1992年シュヴェツィンゲン音楽祭
- ② 2003年1月トリエステ歌劇場
- ③ 2005年10月フィレンツェ歌劇場

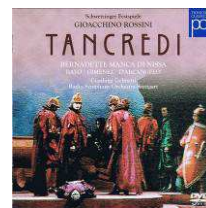
①と③はピッツィ演出でアルジーリオ役がラウル・ヒメネス、②と③はタンクレーディ役がダニエラ・バルチエッローナという共通点がある。以下、順次観ていこう。

◎生誕200周年の《タンクレーディ》

作曲家生誕200周年の1992年に上演された①は、ピッツィにとって3度目の新演出となる。海に臨む青色の大大理石模様をアクセントとする宮殿をメインに、オケピットの左右も含めて奥行きある空間が舞台とされる。アメナイーデ役のマリア・バーヨはバロック系の歌手で美しい声を持つが、技巧的パッセージの音程がピシッと嵌らないのが難点。父親役のヒメネスは柔らかかで格調高い声と響きが魅力で、感情豊かな歌唱も秀逸である。筆者が最も感心したのがタンクレーディ役のマンカ・ディ・ニッサで、芳醇なコントラルトの声と柔軟な歌唱に加え、凄みのある顔つきにも魅せられる（ヤクザ風と言っても失礼だが……）。

1982年のペーザロ上演も指揮したジェルメッティは快適なテンポで牽引するけれど、オーケストラの合奏水準が低く、響きも雑だ。ここに聴かれるフォルテピアノと低弦のレチタティーヴォ・セッコ伴奏は歴史の様式に沿った用法で、アンコールに初演版フィナーレを追加演奏する趣向も気が利いている。

DVD① ピエール・ルイージ・ピッツィ(演出) ジャンルイージ・ジェルメッティ指揮シュトゥットガルト放送交響楽団、南ドイツ放送合唱団 マンカ・ディ・ニッサ(Ms) マリア・バーヨ(S) ラウル・ヒメネス(T) イルデブランド・ダルカンジェロ(B)ほか〈収録:1992年シュヴェツィンゲン(ライブ、フェッラーラ版)〉Pioneer(国内盤、日本語字幕付。廃盤)

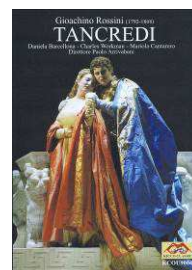


◎日本初演を行ったトリエステ歌劇場の上演

②のトリエステ歌劇場は、演出・装置・衣装を担当するマッシモ・ガスパロンがピッツィの助手だった関係から、大理石様様の神殿や壁画、その構図に師の影響が偲ばれる(原型は③の原点に位置する1999年のピッツィ演出)。とはいえ単なる模倣ではなく、白を基調にした舞台にカラフルな衣装を配し、金色のタンクレーディの甲冑装束が鮮やかで目を楽しませる。しかし個性を出すべく装置をむやみに増やしたのは問題で、第2幕フィナーレはそれが裏目に出てしまった。

タンクレーディを歌うバルチェッローナは冒頭に適用するメッサ・ディ・ヴォーチェ(暫時的強弱)が見事で、闇の中にスポットライトで浮かび上がる幕切れも感動的。アメナイーデ役のマリオラ・カンタレロは、2001年ROFの若者公演《ランスへの旅》で頭角を現したスペイン人ソプラノである。伸びやかな声とテクニックに恵まれ、やや不安定な部分を残しながらも大健闘と言えよう。興味深いのは特殊な声帯を持つテノールのチャールズ・ワークマンで、中高音の色と響きは比較の対象がないほど個性的だ。その声と歌唱に拒否反応を示す人も多だろうが、ロシーニ時代の歌手は現在よりも遥かに多種多彩だったことを前提に「異種」を楽しんでほしい。オーケストラと合唱団は地方劇場の限界を感じさせるレベルで、雑音が多く音質の粗い録音も許容範囲ぎりぎり。ちなみに本作の日本初演は同年6月、このトリエステ歌劇場の来日でなされた(アメナイーデ役のみアニク・マシスに変更)。

DVD② マッシモ・ガスパロン(演出) パオロ・アツリヴァーベニ指揮トリエステ・ジュゼッペ・ヴェルディ歌劇場管弦楽団&合唱団 ダニエラ・バルチェッローナ(Ms) マリオラ・カンタレロ(S) チャールズ・ワークマン(T) ニコラ・ウリヴィエーリ(Br)ほか〈収録:2003年1月トリエステ歌劇場(ライブ、フェッラーラ版)〉Kicco Classic(海外盤)



◎洗練されたピッツィ演出によるフィレンツェ上演

③は、②の2年後にフィレンツェ歌劇場が行った上演である。タンクレーディ役のバルチェッローナはその間に声の深みと厚みを増し、表情、演技、歌唱のすべてに自信が漲っている。肉付きも良くなり、フェミニンな髪型とファッショナブルな服の両性具有的な容姿がセクシーだ。歌唱に成長の痕が著しいことは、登場カヴァティエーナの芳醇な声と力強い発声だけでも明白だろう。

ここでのピッツィ演出はバルチェッローナが脚光を浴びた1999年ロシーニ音楽祭の新演出が初出で、過去の舞台のきらびやかな要素を捨て、擬古典的な様式化をはかっている。段差のない傾斜だけの床、大理石を模した幾何学的構図の巨大な宮殿と可動式の壁、シンプルな衣装デザイン……そのすべてに洗練が認められる。色彩は白黒と白濁色を基調に、シルエットで登場したタンクレーディと仲間たちの朱色の衣装が強いインパクトを与える。アルジーリオ役のヒメネスは①から13年の時を経て風格が備わり、歌唱と演技が円熟し、フレーズに適用する強弱やアジリタに込めた感情表現が見事である。アメナイーデ役のダリーナ・タコヴァは1999年の上演でも同役を歌っており、第1幕の音程は不安定でも第2幕に持ち直し、ヒロインの苦悩を巧みに表現している。

この上演で腑に落ちないのは、ロジューロ役へのカウンターテナー起用である。女性ソプラノ用に書かれた同役は初演から10ヵ月後のミラーノ再演でテノールに移され、その後テノールの持ち役として流布した経緯がある。だからといってカウンターテナーが女声の音域で歌い、アリア(第15曲)を一音低く移調しては元も子もなかろう。その点で指揮者リッカルド・フリッツァの解釈に疑問はあるものの、演奏それ自体は他の2種よりも充実し、管弦楽に適用した部分的ヴァリエーションにも新味がある。〈ディ・タンティ・パルピティ〉の主題を反復する際のオーボエとクラリネットが一例で、筆者はそうした用法を新たな演奏解釈として歓迎したい。

DVD③ ピエール・ルイージ・ピッツィ(演出) リッカルド・フリッツァ指揮フィレンツェ5月音楽祭管弦楽団&



同合唱団 ダニエラ・バルチェッローナ(Ms) ダリーナ・タコヴァ(S) ラウル・ヒメネス(T) マルコ・スポッティ(B)ほか (収録:
2005年10月フィレンツェ歌劇場(ライブ。フェッラーラ版)Denon (国内盤。日本語字幕付)

以上3種の上演はいずれもロッシーニ復興の成果に立脚して歌の旋律とフレーズ反復に豊富な装飾変奏を施し、カデンツァも創意に富む。ロッシーニ歌唱の醍醐味が卓越した技巧のみならず、歌手ごとに異なる旋律のヴァリエーションにあることを理解するためにも、CDを含めた比較をお薦めしたい。